

救急医学

1 構成員

	平成20年3月31日現在
教授	1人
准教授	1人
講師（うち病院籍）	1人（1人）
助教（うち病院籍）	3人（2人）
助手（うち病院籍）	0人（0人）
特任教員（特任教授，特任准教授，特任助教を含む）	0人
医員	2人
研修医	2人
特任研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	0人（0人）
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	1人
合 計	11人

2 教員の異動状況

青木 克憲（教授）（H14. 11. 16～現職）

吉野 篤人（准教授）（H17. 6. 1～H19. 3. 31助教；H19. 4. 1～現職）

安田日出夫（助教）（H18. 10. 1～H19. 3. 31助手；H19. 4. 1～H19. 12. 15）

鈴木 洋行（助教）（H19. 12. 16～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成19年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	4編（2編）
そのインパクトファクターの合計	12.239
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	3編（2編）
そのインパクトファクターの合計	不明
(4) 著書数（うち邦文のもの）	3編（3編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	1編（1編）
そのインパクトファクターの合計	0

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 青木克憲, 吉野篤人。浜松市における自主防災隊の災害医療知識と技術に関するアンケート。日本集団災害医学会誌12:25-28, 2007

インパクトファクターの小計 [0.00]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Ohtsu H, Higuchi S, Shirai H, Eguchi K, Suzuki H, Hinoki A, Brailoiu E, Eckhart AD, Frank GD, Eguchi S. Central Role of Gq in the Hypertrophic Signal Transduction of Angiotensin II in Vascular Smooth Muscle Cells. Endocrinology. 2008 Mar 20.
2. Motley ED, Eguchi K, Patterson MM, Palmer PD, Suzuki H, Eguchi S. Mechanism of endothelial nitric oxide synthase phosphorylation and activation by thrombin. Hypertension. 2007; 49:577-83.

インパクトファクターの小計 [12.239]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 内村正幸, 山口智之, 齊藤守, 秋英雄, 脇慎治, 荻野和功, 青木克憲, 吉野篤人, 森和彦, 牧田正稔。「中学生から始める救急蘇生教育」12年間の経過, 日本救急医学会中部地方会誌 3:23-26, 2007.

インパクトファクターの小計 [0.00]

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 吉野篤人, 青木克憲。脊椎・脊髄損傷の薬物療法。救急医学, 31:1725-1727, 2007.
2. 吉野篤人, 吉野耕司。顎が痛い。救急医学 31:527-529, 2007.

インパクトファクターの小計 [0.00]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Higuchi S, Ohtsu H, Suzuki H, Shirai H, Frank GD, Eguchi S. Angiotensin II signal transduction through the AT1 receptor: novel insights into mechanisms and pathophysiology. Clin Sci (Lond). 2007;112:417-28.

インパクトファクターの小計 [不明]

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 青木克憲。その時、どうすべきかー東海地震発生直後における市民との医療連携を再検証するー、「東海地震、生き残るために」、青木克憲（執筆者代表）、静岡新聞社編、107～148ページ。

2. 青木克憲。損傷。「標準外科学」第11版，医学書院，分担執筆，147～168ページ
3. 青木克憲。体液の変動。「熱傷治療マニュアル」初版，中外医学社，分担執筆，21～27ページ
4. 青木克憲。「救急診療指針」改訂第3版，編集主幹。へるす出版，全709ページ

(5) 症例報告

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し，共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. 葉季久雄，青木克憲，田熊清継，関根和彦，山崎元靖，栗原智宏，相川直樹。治療に難渋した高齢者熱傷患者の2例－治療上の問題点の考察－，熱傷（日本熱傷学会機関誌）33:38-43, 2007.

インパクトファクターの小計 [0.00]

4 特許等の出願状況

	平成19年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5 医学研究費取得状況

	平成19年度
(1) 文部科学省科学研究費	1件 (160万円)
(2) 厚生科学研究費	0件 (0万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	0件 (0万円)
(5) 受託研究または共同研究	0件 (0万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	1件 (50万円)

- (1) 文部科学省科学研究費
- (2) 青木克憲。基盤研究C tissue dysoxiaの画像解析と蘇生，研究代表者，2006～2007，
- (6) その他
鈴木洋行。平成19年度若手研究プロジェクト 40万円

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	4件
(3) 学会座長回数	0件	10件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	14件
(6) 一般演題発表数	0件	

- (2) 国内学会の開催・参加

3) シンポジウム発表

1. 青木克憲, 吉野篤人。シンポジウム 災害・健康危機管理における医療従事者の役割は何か？
東海地震発生時における市民との医療連携 第10回日本臨床救急医学会 2007. 5. 神戸
2. 青木克憲。ワークショップ 熱傷患者同時多数発生時の対応。浜松市における熱傷患者同時
多数発生時の対応。第15回日本熱傷学会東海地方会 2008. 1.
3. 青木克憲。シンポジウム 救命のリレー 基調講演。第16回全国救急隊員シンポジウム 2008.
1. 静岡
4. 青木克憲。ワークショップ 非医療従事者を災害医療にどのように取り込むか。集団災害の
フェーズ0における市民との医療連携のあり方 第13回日本集団災害医学会総会 2008. 2. つ
くば

4) 座長をした学会名

- 青木克憲
1. 第9回日本臨床救急医学会 2007. 5. 17.
 2. 第33回日本熱傷学会 2007. 6. 7.
 3. 第62回日本消化器外科学会 2007. 7. 18.
 4. 第35回日本救急医学会教育講演 2007. 10. 16
 5. 第20回日本外科感染症学会 2007. 11. 9
 6. 第12回S I R Sセプシス研究会 2007. 11. 3.
 7. 第13回日本集団災害医学会総会ワークショップ 2008. 2. 11.
 8. 第43回日本腹部救急医学会 2008. 3. 15.
- 吉野篤人
1. 第5回日本救急医学会中部地方会特別講演 2007. 6. 3
- 鈴木洋行
1. 第58回中部日本糸球体腎炎談話会 2007. 11. 10

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

青木克憲	日本救急医学会	評議員,	専門医認定委員会,	「救急診療指針」編集実務担当
	日本臨床救急医学会	評議員,	査読委員	
	日本救命医療学会	評議員,	編集委員	
	日本熱傷学会	評議員,	査読委員	
	日本集団災害医学会	評議員,	査読委員	
	日本SHOCK学会	評議員,	監事	
	日本腹部救急医学会	評議員		
	日本外科代謝栄養学会	評議員,	用語委員会委員	
	日本血液代替物学会	評議員		
	日本DIC研究会	評議員		
	日本救急医学会中部地方会	理事		
	日本熱傷学会東海地方会	評議員		
吉野篤人	日本臨床救急医学会	評議員		
	日本救急医学会中部地方会	幹事		

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0件	0件

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

鈴木洋行：Clinical and Experimental Hypertension 1回（日本）

9 共同研究の実施状況

	平成19年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	0件
(3) 学内共同研究	1件

(3) 学内共同研究

間賀田泰寛教授（光量子医学研究センターゲノムフォトンクス研究分野）。Tissue dysoxiaの蘇生に関する研究

10 産学共同研究

	平成19年度
産学共同研究	0件

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. Tissue dysoxiaの蘇生に関する研究

tissue dysoxiaは、細動脈まで運ばれてくる酸素含量の変化（DO₂）に対応して酸素の取り込みを調節する機能が低下する結果、組織の要求する酸素量が満たされず酸素負債を生ずる状態と定義される。現在、spectrophotometric analysisおよび組織酸素分圧計により、組織における酸素摂取率（Oxygen Extraction Ratio：O₂ER）、組織静脈酸素分圧較差（Oxygen Gap：O₂Gap）、組織酸素分圧（PtO₂）の3者を測定し、細胞内酸素負債を推定する検討を行っている。平成16～19年度の科研費により、微小循環不全による動静脈シャントのメカニズムを追及した。今後は、侵襲下の微小循環蘇生法としての人工酸素供与体の有用性を検討する。すなわち、エンドトキセミア下、粒子型の小さい人工酸素運搬体（リポソーム包埋型Hb、粒子径0.2μm）の蘇生効果を、酸素分圧分布の画像解析にて検討する。

2. 出血性ショックにおける低血圧蘇生の有用性とその病態解析

平成13～14年度の科研費による「制御不能の出血性ショックに対する低血圧蘇生の有用性に関する実験的検討」において、大量輸液による正常血圧蘇生は生存率の向上に貢献しない可能性が示された。以上の方針が治療の標準として採用されるため、臨床においてさらなる検討が続いている。

3. 日本人の凝固線溶機能の遺伝子多型の解析と出血性ショックの対応

外傷・熱傷による急性期DIC病態を種々のメディエーターとの関連から検討し、とくに、日本人の凝固線溶機能の遺伝子多型の解析を含め、炎症反応の制御をいつ開始すべきか、そのtherapeutic windowを追及している。

4. 広範囲熱傷における大量輸液療法の再検討

広範囲熱傷の初期大量輸液療法について、酢酸リンゲル液の有用性を示すデータが得られたので、今後も症例数の増加に努め新たな輸液療法の指針を追及する。

5. simulation hospitalによる基本診療技術の標準化設計

新臨床研修制度の実を挙げるためには、卒前におけるシミュレーション医学の実践が必要である。大学病院と地域医療機関等が緊密に連携して医師のキャリア養成を行うシステムの構築が必要である。すでに、われわれ救急医学スタッフは、毎週末、静岡県多くの中核病院に出かけて行って、BLS、ACLS、ICLSなどのSimulation Medicineを行い、地域全体の基礎的な救急対応能力の底上げを推進してきた。年間平均約40回のトレーニングを開催あるいはバックアップしている。大学が地域医療機関や開業医のキャリアアップを支える現実的な手段として、Simulation Medicineの体験が有効である。各病院には、十分な教育用資機材がないため、大学にSimulation Medicine Centerを構築し、広く門戸を開放することが重要と思われる。

6. アンジオテンシンII (AngII) 誘発性高血圧による腎病変進展におけるRho-kinase (ROCK) 活性化が及ぼす影響についての検討

AngIIにより活性化されたROCKが腎病変においてどのような影響を及ぼすか明らかでない。我々は、ラットにおいてAngII依存性高血圧による腎病変を惹起し、ROCK阻害薬 (Fasudil) の効果を検討した。その結果、ROCK活性化抑制により、尿中蛋白排泄量が抑制されること、腎糸球体における細胞増殖が抑制されること、腎内小動脈周囲に起きる線維化が抑制されること、を明らかにし、腎病変進展にROCKが重要な役割を担い、腎疾患治療におけるターゲットになりうることを示した。

7. その他の課題ー心肺蘇生における炭酸水素ナトリウムのparadoxical acidosisの解析、侵襲下の代謝活性亢進と免疫抑制に対する薬理的栄養療法の効果とその評価方法、地域の外傷に関する救急医療データの集積と解析、個人の能力に応じた新しい教育ツールの開発、東海大地震に関する集団災害医療の取り組みなど。

15 新聞、雑誌等による報道

1. 東海地震生き残るために、静岡新聞 平成19年 7月25日
2. 浜松市災害訓練、市民との医療連携 静岡新聞 平成19年11月
3. 「救急医の卵」求人大作戦、朝日新聞 平成19年10月13日
4. 中東遠地域の救急医療のあり方について 静岡新聞 平成20年 1月
5. 浜松市シティーマラソンでAEDバイク隊 静岡新聞 平成20年 2月